我が闘争（逃走、通そう・・・）

庄子　義正
課長在職期間 H6.4.l~H8.8.l

幹事から再三にわたり『書け』との電話があり難渋した。

30 余年を勤務すれば印象に残ることも腹膨るることも多くある。

離職（未練がましくまだ現役のつもり）した折　各勤務先での出来事やそれに触れた単語を羅列してスケルトンを書いてみたところ A4 で 5 枚ほどになった。どれ一つ取っても鮮明に思い出し酒が進むのである。ただ書くことが億劫なことと、書く以上は何がしかの役に立たねばという義務感が重なり、と同時に何故俺が書かねばならないという逃避が始まる訳ですが　在職中一番印象深かった艦を中心に書いてみました。

「50AOE（さがみ)」

憧れの「技本」に着任した。

第 1 日目　　挨拶　自衛官はいないの　俺一人？

第 2 日目　　第一印象が大事　早めに行って甲板掃除やらにゃ

女性が一人掃除をしていた　ここだって確か八時半始まりだよな

本間女史　「早いのね　ゆっくりでいいのよ　それからお掃除はいいのよ」

第 3 日目　　遅くていいって言ったって楽だけど甘えるわけに行くまい。

本間女史「ここにお掃除に来たの」　　「？？？？」

「朝夕のお掃除は私の仕事　あなたには別にやることがあるでしょ」

先輩　「明日からは制服はいいよ」

第 4 日目　　楽なことは素直に守り 10 時頃登庁　私服のまま

もちろん定時退庁

こういう日並みが連続するのであるが　逆に何もやらなくていいことが苦痛になるのを見計らったように　下羽班長から　「凹損の計算をやって貰おうか？」

待ってました。　舞鶴で計算盤を作ったこともあり計算の方法は分かっていた。

タイガー計算機から電卓になっていたとはいえ単純な繰り返し計算である。プログラム式の計算機があったらという話しから即座に購入が決まった。ソニーの最新鋭機であり当時でも 30 万ぐらいだったから相当高価なものである。桜井業務班長に言われたと担当の方がカタログを持っていった。約一月後それが製図台の上にあった。今思へば煩わしい調達手続き一切を事務方が全て取り仕切っていたのである。さすが「技術の殿堂」だった。

2度目で最後であったと思うが　「これを勉強しておいて」と青焼きの論文らしきものを手渡された。パネルの座屈に関するものであったが適当にしていた。これが二十数年後に関係するとは思いも寄らなかった。H/C 甲板補強で手抜き工事をしているのではという検査院事案である。真剣に勉強していたら明快に回答できたのではと後悔している。

時折　「馴れたかな」と席に声をかけてくれる方がいた。確かこの方だったと思うが　「技術には階級がない　議論に階級を持ちこまないようにするため」制服を着ないようになったとのことである。制服アレルギーからか着用させたくないという者がいたとも聞く。

それからは気が楽になり、誰それなく話ができるようになった。課業後のテニスが終わると面々はビールで疲れを癒していたがテニスもやらない私がビールの環にはちゃんと入っていることが多くなっていった。「技術には階級がない」　この言葉は大好きであり大事にしたいと心がけている。当時　技本では年頭行事だけには制服を着用していた。声をかけてくれた方が馬場副開発官であったことがその時始めて分かった。

このような環境を良いことに興味のあることばかりやっていた。特に目黒に移ってからは電算機室通いが殆どであった。しかしこのソフト作りのノウハウが後々役立つのである。

流れる予想であった補給艦が急遽まな板に載ってしまった。前年までにある程度のことは整っていたが設計作業は中断されていた。暇にしていた私が「付」となった。艤装をやっていない構造屋に多くの方は不安であったと思う。学生以来の製図作業であり俺の船を作れると思うと意気込みが違ってきた。排水量計算、復原性計算等は自前のプログラムで処理できたので楽であった。艤装は全く分からないので全て小障子さんに頼った。補給ポストが門型であり前方に配置されていることが運用サイドで問題となっていた。艦橋からの視野である。ポストの位置が変わることはトリム調整のため線図を変える事になる。一からの出直しであり変えたくないのが本心である。一方「実際にはどう見えるのか」にも関心があった。線図のソフトに座標変換のサブを加えて描かせたら思った以上の出来映えであった。防衛の担当は一目見て了解し、上層部を納得させた。コミュニケーションも大事であろうが造る側と使う側の接点には互いに認識できる具体的な資料が必要であることを痛感している。この他にも「さがみ」では多くのことを勉強した。この船が進水する時は何処に着任していても必ず見に行くことを心に決めていた。

「50AOE」の装備審議部会も無事終わりその議事録を完成させて大湊に着任した。休暇を申し出ることは今ほど言い易くはなかった。切羽詰って切出した。態度に不自然さがあったと思う。中村部長は「休暇とって何するの？」と私には詰問されたように聞こえた。今なら何食わぬ顔でゴマカせるだろうが当時は純情（？）であったので白状してしまった。

「舞鶴造修所に出張しなさい　そう言うことは早く言うのだよ」と諭された。

今流で言えば『ラッキー！』である。何せ子供3人を抱えている安月給取りにとっては旅

費の捻出は容易い事ではない。この一言も忘れられないことである。

東舞鶴に着く前から雨となっていた。傘が必需品であることは数年で忘れていた。店も開いていず早く船を見たい一心で、ずぶ濡れとなって造船所にたどり着く。船首に立つ。刃物の様に切り立った艦首、後方に膨らんだ船腹、機関馬力の制約から前を相当痩せさせた線図作業を思い出していた。ゲイト付近で艦尾を仰ぎ見る。丸みを持ったでかいケツ、護衛艦とは趣を変えたかった結果である。視線を前に移した時思わず声が出そうになった。異様に大きな、不細工な煙突となだらかな曲線を持ったマストである。数ヶ月後　「世界の艦船」の読者欄にこの煙突が酷評された。側面上の位置関係は H/C 甲板、艦橋の絡みで概略図を書いた覚えがあったが煙突内部がどのようになっているかは知らなかった。ただ機関室配置については舞鶴で上司であった事をよしみに、酒田機 2 班長の所に日参してはお願いして機関室長を極限まで短くさせて貰った。その時はこれが影響したと自分に言い聞かせていた。後日煙突の中は巨大な消音機や全ての煙路が複雑に配置されあれより小さくは出来ないことが分かった。しかし「さがみ」の煙突形状はその後の補助艦に踏襲され現在では何の違和感もない。いろいろな検討の結果成るべくして成った姿である。

いわゆる機能美とはこのような事を言うのであろうと思う。さてマストであるが強度的にポール式で十分と言う事で単純な円筒では色気がないと思い傍らにあった雲形で何気なく描いたものである。概略図の形状がそのまま実際の姿になっている。多くの方々の手を経て図面化されているけれど問題や関心がなければ最初のままなのである。設計の恐ろしさを体験した。

「さがみ」で幸運にも計画初期から参画でき一通りの事に対処できたと思う。　がである。「一通りの事」とは現実に問題となることだけであり、それに追われて対処するのが精一杯であったのが事実である。北島さんがよく言われていた「君達が一人立ちできるようになると転勤なんだよな」　『技術』にはそれぞれ分野・段階があるが、その根っこは『創り出す』ことと思う。『計画・設計』はその基幹部分であり、一貫してこの職域で育成する事も必要と考えるのだが。

「うみたか」

道端の雪が解け始めたのどかな日であった。船が入港しているらしいことは感じていたが何か騒がしいので外を見ると 5 突の駆潜艇がすごく近くに見えた。

護岸が 1M ほど楔状にえぐれ、船首は水線上で左舷が切り裂かれややかしぐように曲がっていた。　妙に落ち着いていられた。『「わし」の船首外板修理と全く同じだ』

遡ること十年前　似たような岸壁衝突で　浦賀ドックで駆潜艇「わし」の船首外板を修理している。当時　右も左もわからない私を　担当であった森口さんが「参考になるから見学

しろ」と浦賀ドックに連れ出してくれた。ピリピリした所から一時も逃れたい時であったからこの一言は本当にうれしかった。修理範囲は図面であらかじめ見せてもらっていたので分かっていたが、こんな狭いところをどうやって裏から溶接するのかに関心があった。

現場は最終段階に入っていた。　簪（かんざし）と言われる工法である。

開口側から反対舷の裏溶接、清掃、塗装を全て行い開口部を外板で塞ぐのであるが、フレームとの接合は要所要所にタップを立て栓溶接の後グラインダーで削り取るのである。

頭の中では修理の段取りと工期のことで占められていた。造船所に回航するなどの考えは全くなかった。奥津部長は着任されて間もなかったが、東京に出張中であった。山本や富田技官達は手際良く各社のドック繰りを調べたり、図面を手配していた。ドックは空いている、後は現場だけである。工務も仕上げも始めは難色を示した。それはあの狭いところをどうやって完全に溶接するのかと言うことであった。あの「わし」で考えたことと全く同じことを現場も考えていたのである。それからは早かった。

馬見塚所長も造修所で修理可能とは考えられていなかったようで念を押されたが了解していただいた。誰だって恥をさらしたくないに決まっている。工期は強引に１週間とした。夕刻には岸壁は何もなかったように修復されていた。施設科の配慮であった。

入渠、部材加工、鍛工用溶接棒（大湊では入手できない代物で函館ドックの飛内さんにお願いした）準備は順調に進んだが一つだけ気が付かないことがあった。船首材を曲直ししても思うように戻らないことであった。そのままにすると必ず変形するのである。

仕上科長が部下に命じて藁をかき集めさせた。時期的に藁が少なくなっているので集めるのに苦労したと聞いている。定盤の上にトタン板を置きその上に藁を厚く敷き詰める、そこにまだ赤い鍛なおされた船首材を置く、一瞬のうちに大きな炎となった。下火となったところでまた藁をかぶせ、さらに大きな炎となる。最後にトタン板で覆う。仕上科長が「海軍ではこうやって焼鈍したんだよ」と一言いった。藁の空間が絶妙な断熱効果を果たすことを後から教えてもらった。まさに先人の知恵である。工事は現場の意気込みもあり早めに進み、乗員は回航もなくなり整備に精を出していた。終盤の現場を見ようと艇内にいたとき、至急電話をとの伝言があった。

「部長が訓練中倒れたすぐ戻ってきてくれ」　中山機関科長

「倒れたぐらいで大げさな　大怪我でもしたの？ 」

「意識がないらしい　救急車で病院に運ばれた」

「・・・・・　すぐ戻る」

事務所に戻ると間もなく病院に付き添った電気科長から

「体を清めた後　着せるものをどうするか聞かれてるけど・・・」

「制服を持たせるからそれまで待っててくれ」

小１時間の経過を聞いてさてどうするかと言うゆとりもなく『死亡』を突き付けられた。

私は思い込みが激しいことを後々自覚し後悔するのであるが　この時も

『厳冬訓練指揮官』＋『訓練中』＋『死』＝『葬送式』＋『特別昇任』であった。

庶務の政さんにモールを買ってきてもらい、それと部長の予備を持って自宅へ、夕方までに付け替えて持って来ること、帰宅しないことを女房に伝えてすぐ戻る。総監部を上げて「葬儀」への準備に取りかかっていた。御遺族の到着も翌早朝と決まった。

講堂の斎場垂れ幕には「故一等海佐‥‥」とあり、棺の上には階級章が見えるように上着が畳まれていた。遠くから見る限り階級章のでき映えは悪くはなくほっとした。

一段落した７時頃から海幕から何やかやと聞いてきた。最初のやり取りは極めて普通であったが段々とトーンが上がり始めたのである。こちらが似たような質問に苛立ったのか、あちらが意図を分からない能天気と誤解したのかは分からない。何せ当時は「海幕」とはお偉いさんがいる所で若造が自ら電話して話すと言うことはタブー視していたし、艦船部では部長しか知る人はいなかったのである。所長は総監部との対応で忙しくされていたのでつまらぬことで煩わせたくなかった。取次ぎに出た事務官の方にこれ幸いと状況を聞くことができた。公務災害の認定を受けるための資料作成と内局折衝を行っていたのである。どおりで部長がいつ何処で何をしてたかをくどくど聞いてきたことが分かった。要するに激務であった証明をすれば良いのである。幸いなことに新部長着任から業務日誌をつけていた。各自その日にやったことをメモし部長への伝言板的な気楽なものであった。さらに後から考えるに幸運なことがあった。それはコピー機がないこととファクスがなかったことである。意図を理解すれば仕事は早い連中ばかりである　増井科長が中心となり業務日誌をもとに素晴らしい行動表を作り上げ　「海幕」に口述転送した。後は認定の決定を待つのみであった。御遺族到着前までに認定してほしいことを総監自ら関係部局にお願いしていたことを所長が話してくれた。

「未明には連絡があるから　家に泊まれ」とのことで同行した。春先と言えども大湊の夜中は凍て付く寒さである。内部から体を温めながらその後のことを話したと思う。

３時頃であっただろうか『認定された』との連絡が入った。「良かった　良かった」と握手した。私の目も潤んでいたことをはっきりと覚えている。

「葬送式」は済々と進行していた。弔銃の音が響き渡った。「うみたか」が今日出渠することは全く忘れていた。その時　ドックでは引き出し始めた駆潜艇「うみたか」から弔意のラッパが吹かれ隊司令が岸壁に向かって大声で挨拶された。

「大湊造修所の皆さん　ありがとうございました」

隊司令は奥津部長と同期であったそうである。

「あさぎり」

道面新課長の行動予定や説明資料の整理を片手間に明日からのことを考えていた。全く畑違いの新課長である。艦艇は海自の重要装備品でありそれ故に艦船課は防衛課と対をなして重視されてきた、それなのに何故と言う思いがあった。課員にも同じ思いを持ってる事がそれとなく感じられる。

その時テレックスが幕内を駆け巡っていた。「欠陥護衛艦」と言うセンセーショナルな見出しであった。内容はH/Cを2機搭載させるため格納庫を拡大しマストを焼損させたとある。「あさぎり」の引渡しが明日である事は全く忘れていた。夕刊には出ていない。出るとすれば明日　引渡し当日の朝刊だ。大変な事になる。

「あいつの予想が的中したか」　十月頃だったか安生から「このような事実があります　腹積もりしておいて下さい」と説明を受け、関連資料をもらった。その時は「それだけ揃ってればお前に任せるよ」と気楽に応対した。当の本人は既に転勤してしまったのである。それからは慌ただしかったが、彼が内局艦船課とは下調整を済ませていたので海幕とのベクトルを揃えるだけであった。Q&Aも案に一寸手を加えて出来あがり、明日の対応次第となって、泊まらずに帰宅した。早朝「朝日」を見ても何処にも記事となっていなかった。胸を一撫でしたが早めに登庁した。都内紙はスポーツ紙だけが面白おかしく掲載していた。各造修所からは一面前面に掲載されている地方紙のファクスが送られてきたが、どの記事も昨日のテレックスのコピーであった。道面課長も心配されて早めに着任された。着任早々嫌な荷物を持たされたと思われるのも嫌だし、艦船課に傷がつくのも嫌であった。概要を説明し「大きな問題になりません　任せて下さい」と言ってしまった。生意気にも門外漢に引っ掻き回されたくないという思いがあった。「分かった」との一言で安堵した。

新任課長はこの後次々と災難に会われたのであるが　その都度「艦船課は有機的でいいね武器課にいるとき羨ましく思ってたよ」と言われていた。確かに縦横の機能的な班編成は艦船課だけであり業務で大きなトラブルは発生しない。誇りとすべきことである。

話しはそれるが幕内改組の折　装備部各課の班編成を装備品単位とする方針であり、船体、機関はそのままの名称であったが「電気」と言う装備品はないので「電気機器班」「電機班」が候補名であった。前者は「電気危機」であるので後者を選択せざるを得なかったらしい。班員は「モーターだけ面倒見るか」とやや自嘲気味になっていた。編制班員が最終の合議を持って来た。顔見知りだったので冗談で今のままにならないか言ってみた。「実はそのほうが説明しやすいのですよ」と意外な返事が返ってきた。訓令上の業務が変わらないのに名称を変えることは余程の理由が必要なのである。即修正。すぐに総括課の班長から呼び出しがあった。嫌味を相当言われたが私も編成班員も強みがあった。「電気」が「電機」になる理由が

ないのである。始末書を書くことで決着がついた。
「船体」・「機関」・「電気」は元々ソフトなのである。

伏兵があった。検査院の呼出である。立石機関班長、と共に防衛２課長のところに出向いた。挨拶も早々に英字新聞をかざしてジロッとこちらを見て一喝
「要求性能を勝手に変えるとは何事か」
「？？？？？」
私は英語が苦手であり一瞬の見出しからどのような事が書かれているかは分からなかったが、「大砲を１門で要求しておいて、造る時に２門にしていいのか！」に至って『要求性能』に疑念を持っているのを理解した。当方としては国損を与えないよう対処方を考えなければならないとばかり思っていた。思いの違いとこちらの役職不足からか「徹底的に追求する」を最後に聞いて帰ってきた。
まず経緯調査と技術的な対策に取りかかる。経緯調査は長殿が担当した。本件に関する資料を関連部署別に時系列で整理した　B4 で 5~6 枚ほどの立派な資料となった。最終的には煙突とマストの位置関係に収束して行くのであるがその夫々の過程で関与した方々の思いが裏に読み取られそれを大事にしたかったし、腹を決める事にもなった。対策は藤山に担当してもらい、一目で判る資料を注文した。甲板上の高度ごとに枠付のトラペアで排気温度の等温線を描き上から透かしてみる代物であった。温度分布が視覚的にわかり両者の相対位置がどのくらい必要であるか一目瞭然であった。どうせ造るならスマートにと言うことでこれを飛び出し絵本のように畳める造りにした。いよいよ幕長説明である。数枚の改造案資料とこの飛び出し絵本で数分の勝負であった。東山海幕長は最後にニヤリと「夜店の覗き箱だな」、洒落が分かるなと感じた。決裁を頂ければこちらのもの、思わず「そうです」と大きな声で返してしまった。
検査院の実務レベルも当初は仕様変更の取り扱いに関して調本を巻き込んで執拗に追求してきた。しかし呼び出される度に検査官の前で瀧本建造班長と議論をしたり漫談をやるのに呆れたのか呼出間隔は段々と長くなっていった。最後に要求された基本図、参考図の最終見解も時間切れで出さなかったと思う。後まで残ったのは「『要求性能』の提示」である。調査官は上司から「確認」の命を受けている。防衛課は門外不出の書類であり見せたくないのである。装備品で何か問題となれば調査官と折衝するのは我々技術職である。私としては彼らとギクシャクとした関係にはなりたくないし、彼等にも公務員として秘守義務があることから、部分的な開示と言うことで両者の了解を得た。当日は原本に目張りをしたり、数枚をホッチキスで綴じたりして防衛担当の確認を受けて検査院へ。開口一番に秘密である事と見たことを部外者に知らせないことを告げ、書類をテーブルにおいた。調査官は副長を含め 4、5

人いたと思う。全ての視線は書類に集中した。餌を前にした犬のようであった。ややあって副長が「こんなに薄いものなのですか？」と意外な顔をした。それを受けてか調査官の一人がメモ帳を出して決済印の日付を丹念に確認していた。調査官として真贋が第一であろうが、こちらは疑われていると思うとムッときた。端にいた調査官が数ヶ月前に起きた『なだしお』事故の状況を話題にしてきたので雑談に応じていた。視界の端では副長が袋とじを上から覗いたり、目張りを裏から見ているのが分かった。その調査官が話しかけてきたのも副長への配慮かあるいは作戦であったと思う。そうなる事は重々承知していた。

彼等の信頼を得る事が第一であった。機数の確認と要求性能にはどんな事が書かれているのかが分かった満足感であろう、いつにもない挨拶で検査院から送られた。そして本件は「詳細設計の範疇である」と言う基本方針どおり時間が解決してくれた。その後　潜水艦蓄電池、H/C 甲板等と検査院との腐れ縁が続くのである。

舞鶴に転勤後　賞詞が届いた。『･･･会計検査院との適切な対応･･･』調査官がこれを見たらどんな思いをするかと笑ってしまった。

「なだしお」

改組を控え中央通路に壁を設ける下準備中だったと思う。課内が急にざわめきたった。テレビには潜水艦の甲板に乗員が整列しているのが映し出されていた。艦船課長は職名で事故調査委員に指定されている。着任時　「定時退庁」を明言し実践されてきたが、この日以降数ヶ月はまともに帰宅できなくなった。連日委員会が開かれその都度　内容の説明を受けた。最初は救命具の装備に関する事が多かったが情報が詳細になるにつれて衝突態勢や潜水艦の運動性能へと焦点が移っていった。破損状況がどの様になっているのか明瞭に分かるのは現場差し押さえの関係があり１週間以上あとであったと思う。課長の手振りの説明にまどろこしさを感じた。模型が必要であると感じた。潜水艦はあるだろう　でも相手の第一富士丸は？いずれにしろ潜水艦の修理があるその時の説明資料になるし、構造を事前に理解できることから、取り敢えず前半部の模型を白ボール紙で作り始めた。構造図どおりに部材を作成し組み立てたので損傷範囲や復旧範囲の説明には便利であった。

問題は第一富士丸の図面入手である。海保や海運局は運輸省管轄で本件では原告・被告の関係で到底無理、そこで造船各社に入手方をお願いする事になった。普段ならどこかの設計屋さんと顔を合わすのだがここ数日来その機会がないことに気が着いた。会社組織としては本当のお上は「運輸省」であり、本件には関わりたくないのだと思った。しかし救いの神はあった。某社の部長が個人的に線図、構造図、配置図等、そのほか検査成績書までも入手してくれた。彼もまた行き過ぎた『海自バッシング』を何とかしたいと言う一心であった。早速前半部の模型を作り上げ課長に渡した。以降の衝突態勢の議論には重宝したらしい。

船屋としては衝突・沈没は技術的関心度が高いものである。週を経る頃からニュース特集で模型を使ったり CG で再現映像を流し始めた。しかし、事故究明と言う観点は一つもなかった。そこで「海自」でも権威のある所に調査協力を依頼することとし、別所教授の手を煩わせて母校にお願いに行った。快く相談に乗ってくれた教授もいらしたが結論は「防衛庁に関わりたくない」で終わりであった。やはり学問より組織なのである。後藤副長への報告を考えると気持ちは「行き」と「帰り」で全く逆転していた。技本では CAD を導入し始めた頃であった。両船の線図があるので損傷状況が詳細に分かれば破面の組み合わせで衝突態勢の推定がつく。技本にもお願いして北島首設を始め約十名の俄か詞査団ができた。名目は「台風対策の調査」　後藤副長のアイデアであったらしい。第一富士丸は 3 管保安部前に係留されている船台上にあった。証拠品ではあるが横監が船台を提供している関係で管理は横監の管轄となっていた。目の前で十名余りのものが数時間も掛けて「台風対策の調査」をやっていると本当に思ったか定かでないが、何の問合わせもなかったことは有り難かった。燃料流出があったので船底に破口があると考えていたが数条の擦過痕のみであった。船首の破口から油が滲み出ていた。防水区画に燃料を搭載していることであり、明らかに運行違反である。初期に救助され油を大量に飲んで後日肺炎で亡くなられた方がいる。少なくともこの被害者は第一富士丸側の業務上致死によるものである。船尾のブルワークは付け根から座屈していた。防撓材は錆びて細くなっていた。船尾から滑り落ちる時水圧を支えきれずに一気に座屈し大量の海水が船尾区画に流入したと考える。ニュースでは海底と接触して壊れたものと報道していたが全く違う事が分かった。船尾船底、舵板は砂泥が強く付着し、擦過痕があるがブルワーク外面は塗膜のみであった。船内に入るには勇気が要った。修羅場となったところである。自然に手が合わさった。狭い蚕だなのような所に布団、雑誌、缶ビールなどが散らばっていた。布団は一月近くたっているせいか生乾きの状態であり、懐中電灯一つの暗さでこの感触には鳥肌が立った。前部のキャビンはあらゆる器材がひっくり返されたように散乱していた。前部の天井に直径 20cm ほどの蓋付の通風筒があった。内側には軽いものがびっしりと詰まっていた。室内の空気はここから一気に抜けていったのであろう。これが密閉されていればもしかしてと言う思いがあった。

この調査は時期的な事もありフライングしたので、正式に技本本部へ依頼したが、またもや「組織」の壁に閉ざされてしまったのである。虚しい気持ちになった。海難審判も航法の問題に重点が置かれ衝突の態勢や沈没の過程の議論は薄れて行き、幕内も落ち着きを取り戻して行ったのである。

半年ほど経った頃だったか　潜水艦の前部破損の報が入ってきた。水中写真を見ると見覚えの破損状況である。ただ位置が下側になっていた。ロッカーの上で埃を被った例の模型を取りだしゆっくり回転させてみる。半回転ぐらいでぴったりと一致する。説明資料なしで幕

長室に飛びこむ。

「工期や経費は大丈夫なのか」

「造船所は川重神戸です 『なだしお』で手も慣れていますし、経費も実績値があります。」と反射的に返答した。

暫くしてボソッと一言

「俺に嫌な事を思い出させるな」と苦笑いを見せた。

全責任を負われ心労されている事をすっかり忘れていた。今になって余計な一言を言ってしまったと、申し訳なく思っている。

年を越してからだったと思うが第一富士丸が浦賀の川間ドックで解体される事になった。改造時の固定バラストが正規に積まれているか確かめたくて長殿に調査をお願いした。例の検査成績書に疑問を感じていたからである。単軸船でありながら左右の旋回半径が全く同じであった。彼が綿密に調べ、バラスト量は低めではあったが確認できた。

「終わった」という気持ちと、目に見える成果が何もなかったという虚しさで複雑であった。

「03DD（むらさめ）」

「それではこの調整部会の結果をもつて装備審議会の答申と致します」

やっと漕ぎ着けた安堵感と今までやってきた回想が交叉していた。村中防衛部長の「ご苦労さん」で我に返った。

それというのも終了直前に突然の質問がある委員から出たからである。

「排水量が増えると船価が上がるのでは」

極めて常識的な質問である。しかし誰も想定していなかった。確かに重量を 100 トン近く増加させている。強引にやった事ではあるがその理由には詳細な資料を用意していた。内局の内諾を得てのものであり、重量増加に対しては自信があった。船価については建造班で試算してもらい変動は微々たるものと聞いていたがその内訳は手にしていない。座は静まり返っている。後刻資料提出の手も考えたが最後にしたほうがいいし、技本側から発言するのも変である。艦船課時代に船価が高いと話題になったとき船・機・電・武別にトン当たり船価を各艦について計算したことがあった。物価上昇の影響をなくすため、自衛官一人当たりの経費で除して指数化した。船機電は時代変化なくほぼ平行であり、船体を 1 とすると機関は約 2、電気は 2～3 の所にあった。武器は直線状に上昇して 63DDG では 14~15 になっていたと思う。「機関部のトン当たり単価は船体部の約 2 倍あり　全体重量では増えているが機関重量が減っているので船価は変わりません」早口で答えた。声は上ずっていたと思う。

具体的な数字はもち合わせていない。聞かれたら艦船課にお願いして後刻提出で逃げ切る

覚悟である。冷や汗でビッショリとなっていた。

「ああ　そんなものなのですか」その後の質問はなかった。ホッとしたのは私だけではなかったと思う。

船体班に在籍している時には業務そっちのけでパソコンを弄くりまわし顰蹙を買っていたと思うが、多少役に立っていると考えると気が楽になった。

試行錯誤や資料作りには主設付の林田がとことん付き合ってくれた。彼は単身赴任であったのでこちらも何の遠慮もしなかった。燃料過多で効率が低下する事もよくあった。それはそれなりの想い出となっている。警備の方も最初は胡散臭そうにしていたが林田の人徳であろうかいつしか、深夜になると巨体を揺すってわざわざ確認しに来てくれるようになった。相当無茶をしていたのだろう。久しぶりのＰ作業中に腹痛を起こす。始めは食中毒と軽く考えていたが二日後には即入院となってしまった。その時は痛みはなく意識が混濁していた。若いナースが数名でかいがいしく世話をしてくれていたのであるが、願望と現実を混同していたのであろう。駆け付けた大塚に「ハーレムのようだよ」と言ったらしく、彼を呆れさせたそうである。病院は体力が回復するまで検査をしないので病状をはっきり説明しない。庄野開発官も心配され「中病に移せ」と指示されたそうであるが、その頃には頭と口は戻っていたので即座に「断れ断れ　親分に監視されるのは嫌だ」と頼む。林田は間に立って苦労したそうである。結局主治医の言うとおり十分な休養を取らせてもらった。従って基本設計では全く仕事をしなかったことになるが、「03DD」への思い入れは基本計画で十分果たし満足している。「船には正解がない」これが私の学んだ事である。「船」そのものが一つの社会となっている。しかも限られた空間である。その中には相反する事が数多く含まれ、今いる環境の比ではない。行きつく所はこれらの矛盾をどうやって調和させるか、あるいはどれだけ容認するかである。料理にも似た点がある。万人に受け入れられる味付けもあれば、通が好む味付けもある。この「艦」は「対潜」特に「ソナー」の味を損なわないよう最大の配慮をしたつもりである。

元凶となっている機関馬力を下げるために船長を伸ばし、極限まで痩せさせた。また伝達音を低下させるためにソナー後方にはタンクを避けて長い空所を設けた。水中音響の第一人者である水野武装室長からは興味のある話しをよくしてもらっていたが、「これだけ環境を整えたから　並みの成果だったらソナーが悪いのですよ」と冗談を言ったことがある。実の所今でもその成果を気に掛けている。

――――――――――――――――――――――――――――

技術革新もあり時代背景も変わり年代が変われば話しの周波数も合わないのは当然です。

しかし技術畑には「創り出す喜び」があり、これは不変なことだと思います。本会もこれを種に末永く発展する事を最後に祈ります。

（終）

艦船技術会会報（平成 13 年 4 月 第 32 号）から